常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅡ

令和３年１１月１９日(金)
その２

◇ 修学旅行記❷・奈良編

最初の目的地は、世界遺産の法隆寺。日本最古の現存する木造建築（建造は飛鳥時代）ということもあり、建物のほとんどが国宝である。今回の修学旅行で児童が目にした国宝は、法隆寺や興福寺宝物殿の見学もあり、その数は優に百を超える。三百ほどと言ったところだろうか。

さて、法隆寺で「神様がくれた奇跡があった。

一通りの見学をして法隆寺を後にする際、南大門を抜けたところで、見覚えのある方とばったり出会う。小豆坂小学校で６年生の担任をし、修学旅行の児童を引率する恩田先生だった。６年生にとっては、元担任の先生と半年ぶりのご対面。

出会ったのは奈良県。観光順が違ったら、通る道が違ったら、ほんの少しタイミングがずれていたら、出会うことはなかっただろう。ピンポイントの奇跡だ。子供たちは笑顔、恩田先生も笑顔。旅の成功を占うような奇跡的な出会いだった。

続いて向かった先は春日大社。ここからは、熟練のボランティアガイドさんの案内が添えられる。

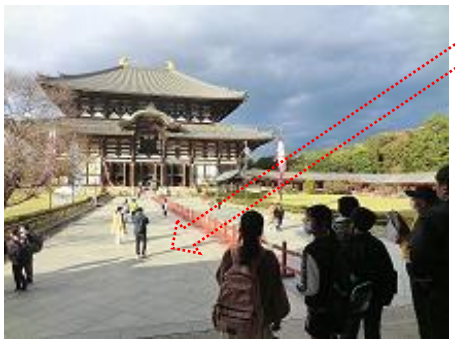
感心させられた子供の姿がある。それは、ガイドさんの説明に頷（うなづ）いて応える真摯な姿。こうした反応は相手を乗せる。出てくるちょっとしたエピソードが心をくすぐる。

「あおによし　奈良の都は　咲く花の　にほふがごとく　今盛りなり」
奈良の枕詞である「あおによし」は、「青丹（朱色）よし」。

写真赤丸●のように、「朱色柱と緑の格子の美しさ、相性のよさを表したことば」なのだそうだ。勉強になる。

若草山を抜け、野生鹿を横目に山を下れば、東大寺が見えてくる。歩いて奈良の名所を巡る旅は、素敵である。

東大寺の中門から大仏が居する中金堂に続く石畳は、30 年程前は砂利だったとのこと。石畳をよく見ると、3 種の石板から成っていることが分かる。中央はインドの石、その両脇は中国の石、端を固めるのは日本の石。インドから中国を経由して日本へ。仏教伝来を表している。（ボランティアガイド談）



写真は曇りに見えるが、影が表すように天気は快晴。ぽかぽか陽気が修学旅行での学びを応援。天気に恵まれたのは、行儀のよい子供たちの心がけ。

「柱穴抜け」は、コロナ対応のため穴の封鎖は続く。早期解禁が待たれる。

お小遣いで「鹿せんべい」を購入し、鹿にふるまう。昭和 50 年代初頭は 50 円だったが、現在は 200 円。売り上げは鹿の保護に全額充てられるとのこと。

坂を下って興福寺へ。五重塔や金堂などの見所の多い興福寺であるが、何といっても国宝「阿修羅像」であろう。自分も初見の感動は忘れられない。昨年は児童が入場できなかった国宝館だが、今年は国宝館をセットにした予約で、教科書で見た国宝を児童も目の当りにすることができた。

「阿修羅像」と力感が対照的な「金剛力士像」も。運慶や快慶が彫刻の主体となった東大寺の大きな金剛力士像。対する小ぶりな興福寺の木造金剛力士像。同じ慶州派が制作した 2 組 4 体の共通点を、児童は感じることができたろうか。

感動との引き換えに、足裏がパンパンの自分と浅野教諭の 1 日目なのであった。